

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	部報
Author(s)	
Citation	龍南會雜誌, 169: 57-72
Issue date	1919-03-31
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6465
Right	

部 報

演説部報

豫餞公開演説會記事 (ツノ二)

(五月二十六日)

△新人の叫——一、一、坂田主税君——籠に入れられた小鳥が初めには籠に對して激しく反抗し、次第にこれに諦め、遂には小天地に満足して遇々外に出されてもまた籠の中に歸つて來るやうに、吾人青年も今や周圍の不當なる束縛に馴致せられてその暴力を甘受しては居ないか。かの社會の風潮に迎合するに敏感にして、汲々として打算し順應じ、只管一家の安固を計るが如き、現代青年は餘りに自我を蔑視し餘りに社會力を過大視して居る。吾人は、あらゆる不利なる境遇の壓迫に拮抗し征服しつつ自家の理想に邁進した幾多の英雄を吾人の祖先に有しなかつたか。更に氷の如き死の豫感も密の如き愛の囁も、かの *creed* の標語を驕して凱々たる白雪の山に憬れ行きし青年の火を燃ゆる心を阻み得なかつたではないか。かゝる熱烈奔放の意氣こそ、舊日本の停滯せる時勢を打破して、世界をして「輕侮より喫驚」に喫驚より感嘆に移らざるを得ざらしめし「明治の新日本を建設したのであつた。時勢の異なる口實とするこ勿れ、如何なる時代に於ても沈滞せんとする時代精神の覺醒者は常に青年の不

獨奔放なる自熱的自由精神——時としては無謀無分別に陥りかねざる尊貴なる青年の意氣である。ホイットマンも歌へる如く、吾人は未だ若くは不完全である、然し意氣に燃ゆる若き胸に生命の萌芽を強く抱擁して、自由に大膽にこれを成長せしめゆき能ふが故に、青年は尊い。

△龍南兄の使命——一、一、田村秀吉君——現代は自らの織り成せる種々相に眩惑せられて人世の根本義を忘却して居る。根に培はずして徒らに枝葉の繁茂に焦慮する現代は遂にはその幹までも枯すであらう。さして以下製鋼所問題其他政治、實業の道德的腐敗、宗教哲學の無力、教育事業の不振等を指摘し、これら時弊の總ては着眼點の錯誤より來る價値の顛倒即ち人生の理想に對する近眼亂視より理想達成の一手段を人生の目的そのものと誤認しこれを唯一の生活目標とするに基因す（斷じ）萬人を感激せしむべき大理想の明瞭なる把握を缺く現代は、従つてこれに猛進する激烈たる生氣を缺き、従つて又必然に歩行の大膽さ確實さを缺く。それが結果は方に國家の衰頹と國民の墮落である。然してこれが唯一の匡濟策は全國民をして己の理想を最も明瞭なる思惟によつて最も最瞭に認識せしめ、そこに一の汪然たる *Commanding Spirit* を發現せしむるに在る。然るにそれが責任を雙肩に負ふべき一般の現代青年は、餘りに時勢に捫れて、現在の陋態に對して感憤興起し得ぬまでに無感覺になりきつて居る重大の責任は——吾人學生に懸る。先輩及社會をして、吾人に對する不當の束縛と干渉とを差控へしめよ教育當事者をして、消極的ナセヨ主義を放棄し、積極的ナセヨ主義に依らしめよ、國事に對して人類の運命に對して無頓着なる生命稀薄の「順良の學生」よりも、

敢爲にして剛毅なる豪勇の學生を遙に多く現代日本は要求して居る歴史的に又地理的に「熊本五高」なる語の感じそのものなる剛毅朴訥の兒五高生が自家責任の自覺を奮起さ、これ吾人衷心の願である。

△懷古三年——一、三、丙 渡邊潮君——(眞摯なる態度に白熱の閃きを包む坂田君と、壇上に立つて振上げし君が鐵拳の如くに剛快なる村田君の態度とに對して、痛ましくも雄々しき龍南三年の生活を追懷し來る君が音聲と瘠軀の如何ばかり哀切にして尊貴なりしよ。)

生來初めて母の膝下を離れて遠く熊本に來りし際の寂寥悲哀の感に談を起し、ついで「この哀感に克たんが爲にせし一日十六時間の勉強が遂に健康を破壊し、悲憤と煩悶と絶望との間に轉々せし第一年の生活」が述べられた。燃ゆるが如き希望を胸に懷きつゝ自らの身体に制約せらるゝ時、自らの意志を他の絶對者に依從せしめ、自らの満たされざる心に慰めを力とを與ふべき何等かの對象を求めんとするは、人間自然の情であると言はれる。然してかかる場合の宗教經驗は素朴の信仰の失れが多いとも言はれる。君も亦「絶望の極に於て見出した神に信頼することによつて、淋しき第一の生活より、花陵會館時代の法悦と歡喜とに充てる第二の生活に蘇生することが出来たのであつた。然しその使徒的な信仰は、自由思想家なる信友とはしくもある問題に就て衝突し、遂に會館を去らねばならなくなつた。これを起點とも見るべき第三の生活は激しい靈肉葛藤の時代であつた。然しその一方の輕々しき否定により、又は二つのものの安價なる妥協によつてこの苦惱を脱しようとは思はぬ。飽くまでも之を抱擁し続樂しつゝ不斷により高くより偉大なる自我を其上に建設してゆきたい」最後にハイネの詩を誦して龍南に *Adieu* な歌を要

求した心からの君が叫びは龍南の胸深く宿つて、餘りにもはびこる淡々しき、サレツタントの歌に抗すべき新しきいのちの歌の種子となるであらう。

△生ける屍——一、三、丙 井手實雄君——「生ける屍」が翻譯てふ去勢を経更に藝術的理解なき一女優によつて上演せられても猶トルストイの「生ける屍」だとして通つて行くのを見る時、今更に日本の形式化を切實に思はせられる。現代日本に充滿せるものは、硬化せる形式であり生命なき鐵滓である。現代の宗教が吾人の心靈に力強く働きかけて來ない所以は其が吾人の實生活と、乖離せるものであり、吾人に加へらるゝ外よりの形式だからである。モーゼの律法を文字に於て支持せる時人の敵であつた基督の信徒は、今やその信仰簡條と聖句と儀式とを徒に傳承して居る。あらゆる眞理は吾人の實生活と共に一の徹底せる堅實なる全体を形成して不斷に改造せられ常に鐵滓を剝落し行く所に初めて永遠に新鮮なる生命を護り得るのであるのに、多くの時と所とを隔つる我國に於てかの信條が絶對不變の眞理として概念的に保存せられて居る。こゝに於て比較的多くの聖句を記憶し、聽衆の爲にする朗讀的祈禱其他の儀禮に習熟せる職業的宗教家階級の發生を見る。然も佛教僧侶に於て職業化は一層甚しい。教育に於ても現代は形式的である。知識偏重の教育主義は無批判に踏襲せられて、雜駁な知識の暗記のみが強要せられて居る。然も知識の吸入は直ちに忠君愛國の保証たるを意味せず、朝に表彰せられて夕に告發せらるゝ地方青年團の存在は果して如何なることを吾人に暗示して居るか。多くの教育家は從來の方針をのみ全く自然なもの、必然的なものと考へて、より新しく、より正しき他の方

針と組織との存在を認めずまた認めんとの努力もしない。然して現前に起り来る總ての社會現象には吾人の眼を閉ぢ耳を塞ぎ舌を抑へしめて只管に貧弱なる彼等の知識の一部習得することゝ吾人に要求する。教育家は彼の生徒に就て、その試験點以外の何者をも知らぬ。屍は墓地にのみあるのではない、會堂に寺院に學校に果た議院に廟堂に、現代の日本は生ける屍に滿されて居る。その灰色の現代に綠さ輝き紅さ燃ゆべきものは龍南の生活である。然して龍南に高調すべきは一の自由なる囚はれざる精神でなければならぬ。灰色に蠢動する生ける屍を葬れ、そこに新綠燃ゆる新生命が萌は出るであらう。

△甘柿と澁柿——一、三、乙 岡本梅次郎君——「現代の教育家は恰も櫻柿を作る人の如し」と喝破し、櫻柿を造る人の手數と苦心とを説きたる後、「然るに櫻柿は甘く現代教育は甘からざるは何ぞ」と反問し「教育家は完成することのみに急にして、その者の根本的性質、及び其性質に其手段が適するか否かを考慮せず、個性を無視しその精神生活を没却し、萬人を劃一制度下に劃一的教育を施すこと、恰も甘柿と澁柿とを同時に櫻柿にせんとするが如し。この無謀無策こそ教育事業失敗の大原因なり」と斷定し、「個性の尊重と自由なる精神生活確立との爲に、現代教育制度の改造を必要なり」と痛快に手短かに論述し、最後に「龍南に於ける獨善的態度」を排し「他の者に對する indolent の態度をさるなからん」と同一理想に醒めたる者の協力誘導」とを慈源して降壇。辯論は自己總体の白熱的表現なりといつた藁田君の言葉がゆくりなくも想ひ出された。

△卒業生を送る——坂田先生——劈頭先づ二匹の蛙の京大坂見物失敗の寓話によつて、徹底的體驗と正鵠を得たる着眼點との必要を説

き、龍南に高調すべき自由を論するに當つてもこの兩者の欠くべからざる所以を述べ。人は或觀察態度よりして物的機械的個人と精神的意識的個人とに分ち得。物的價值感情をのみ有する人、若しくは何事に就ても自らの思惟能力を働かさざる人は、これを取扱ふにも物理的法則を知悉すれば可なり。即ち玉突き臺の上に於ける球を衝く場合に於ける如く、(手腕を要するは勿論なれ共)一種の數學的物理的豫見によつて、或は黄金の或は權力のキューにて衝けば、物的個人なる球は只衝く人の意の儘に動かすを得べく、従つてかゝる個人は到底自由の境にあるを得ず、かくてしも猶自由を叫ぶが如きは自らを知らぬ僭越事なり。之に反し個人にして所謂意識的個人に教養せられ居らば、その掟大せられたる意識には宇宙の大をも包括しうべく、瑣々たる金權威壓の如き彼に對して何等の權威にも値せず。かゝる確實性ある自律的の人格者にして初めて眞の自由を確立しうべし。

然してこの自由にして若し、英國流又はミル流とも呼ぶべき政治的自由と、佛國流ルソー流とも稱せらるべき天賦人權論に胚胎せる社會的自由と、更に中世紀の獨斷的教權に對して擧げられしルーテルの雄叫びに生れたる獨逸流の精神的自由とに分ち得とすれば、吾人が龍南に高調すべきは當に最後のものならざるべからず、と論じ、ルーテルの所謂「萬物の僕にして同時に萬物の主たるクリスト者の自由」に就て説明し、宇宙生命に參せるもの、自由無礙なるべきに想を馳せ、最後に吾人が自己の進路を擇ぶにも亦、單に形式の高下尊貴に拘泥せず、物的價值にのみ注目することなく、宜しく精神的に評價して人生に切實なる意義ある生活の一部を負擔したきものな

りて結はる。

△豫餞の辭——宇佐美部長——傳統の繼承と發揚、傳統と自由との關係に就いて常の如く決辯怪辯唯流るゝが如く、その「前人未發の境を開拓せよ」この高き教は、既に已に吾人の深く感銘せる所なるを以てこゝに贅せず。

△茶話會には校長先生、宇佐美、江部、坂田の諸先生も御出席になつて、我等の誤解を正したり、演説の態度に對して忠言を與へたりせられた。涼しい雨を含んだ戸外の夕靄に、ほてつた頬と耳とを冷したのは七時に近かつた。「熱はあつたけれど、演説の内容は概して貧弱であつた」とこの定評ありし今日の演説を、不完全な余の理解と筆さによつて愈々光なく力なく熱さへなくした罪を、辯者と讀者とに深くお詫びする。(徳永)

討論大會

(日本によりて國家主義世)
(世界主義何れなとるべきか)(南)

一月二十日濟美館に於て午后二時半より開く聽衆五百を算す最初、立花強助(世界主義)當壇、人は自己本位の生活を捨てて廣く世界と交渉を要す獨逸は自給自足主義に倒る世界主義は天の理法云々。第二、宮崎二見(國家主義)世界主義も結局は國家主義に歸す。國際連盟も國家主義の顯現なり云々論旨折衷に傾く。第三、柳爲基(世界主義)正義仁道、日本の國是、これ世界主義なり。第四、田村秀吉(國家主義)國家主義これ侵略的のものならず、自由平等をねんとする國家主義なり、國情、日本は國家主義に適す、世界主義をさるの可能を疑ふ。第五、高橋正男(世界主義)利己的國家主義は我が

不万足とする所なり。自我の本質は宇宙に道あるの信念、國際法の徹底はこの世界主義なり。第六、坂田教授(國家主義)米のモンロー主義も國際連盟主張によりて害せらるゝ能はず。これ世界主義が國家主義によりて一頓挫を來す好例なり世界主義は英米より國家主義は獨逸、唯獨も、現狀打破以て英の如く權利を主張したるに止まるなり、我國狀獨に似たり。今、世界主義をいふは痴人の妄言なるを恐る。財力を利用して組織し國民をして幸福になさしむるは國家主義なり吾人の財力の貧弱、肉体の倭少を以て、世界に戦はんぞ、唯團體と財力との組織を待ちて進展せざるべからず。要は唯世態進運の智識綜合に決する所あるのみ。第七、中野峯夫(世界主義)兩主義とも徹底によりて可なるのみ。兩主義内容を同じくする以上は不利をさけ名をとりて現代打破をなすべし。英は國家主義をとりて世界主義を標榜せるなり。英米は資本的侵略主義をさるこの資本なき我は彼等に對抗し國家主義を行ふ能はず、我等功利なる立場より世界主義をさらざれば損なり。最後に田中教授出で曰く世界主義は個人主義なり。この個人主義をそのために國家を利用するなり。國家主義は團體本意なり。これにより個人の利益を増進せしむるなり。この二義は太古より並行し來れるなり。兩主義とも理想的に行はるれば批するなし。こゝに一致するなり。吾人は適不及の地位を免るゝ能はず。世界主義は不及なる時はその個人主義は利己的となり。過ぎたる場合は一毛以て天下を利するも與へざるなり、天下を捧げて來るもさらざるなり。さなる、國家主義の不及の場合は個人を機械化し人格視せず、その過ぎたる場合は現に見る獨の場合なり。さればこの中庸可なり、理想にすれば何れなとるべきや。世界主義の

極はロシアの悲劇に知る。國家を維持するは吾が利益なり。これ兩者にても然り。故に吾人は主義として國家をとりたるが吾人の利益なり我が國家主義や國力漸次進歩し世界的同等的になりしは世界主義より見て、その理想に近づきつつあるなり。これを國家主義より見れば又進捗なり。今世界を一聯邦に比す。平和を希望するや恰も獨逸聯邦にロシアある如く、吾人は國家主義によりて富強文化を發展せしめ大和魂を發揮しゆかば世界にて兵火の要なきや論なし。さ。河合先生は今日御出席なかりき。

演說部例會(第二學期)

△開會の辭

一、汝自らを知れ

二、ソロモンの榮華

三、生むための苦痛

無技巧の雄辯。誠實に實相を凝視し解剖する力と、靜かに包容し根

強く局面を開展せんとする力とに富む。

四、吾人の偉大なる約束

五、吾人は斯く思ふ

六、己に求めよ

七、誰が？誰が？

近代人の悲哀、信ぜんとして信じ得ざる悲哀が、ストリンドベルヒの「父」の例によつて悲痛に深刻に叫ばれた。けれども、それらの焦燥と疑懼の中にも猶「闇に輝く」道の光」はないものであらう

か。

八、龍南怒號會の諸君に

南 清之助君

君の言句は悉く君獨自の靈悅的狀態から迸り出でる。あの眞摯にして光彩ある言辭が、若し聽者内心にそぐはぬ感を與へたことすれば、それは聽者の感情が君の感情より遙に調低であつたことを意味すると思ふ。

△閉會の辭

(龍嶺怒號會以後の演說部報は都合により次號に譲ることとなしぬ)

水泳部報

音に名高い玄海は偉人の胸の様に大きい鯛も跳れば鯨も咆ゆる。荒れる時には血だらけになつた怪獸のやうに風は唸り濤は裂ける。が靜かな日には鳥も通はぬと云はれる灘も湖のやうに閑閑に眞珠の様に澄んだ水底の白い石が一つ一つ數へられる。松浦瀧は美しいローマンスやつましましやかなエピソードに富んでゐる。遠い昔を尋ねれば神功皇后垂綸の物語から、夫戀しさに石になつたといふ佐用姫の哀話、近くは豊公証明の雄圖が名護屋城趾の夏草の茂みに偲ばれる。柔弱な青年達があたらしい夏日を閑居や午睡に過してゐる間に龍南の若人達はかうした詩と畫とに包まれた水郷で天地の大を謳歌し自然の美を讚美する。朝風の音に眠を覺まされ夕潮の香に夢を誘はれながら。

自治は龍南の生命だ御馳走が無い時は茶漬で済まし有る時は鯛の

さしみに舌鼓を打つといふ自炊制度、やかましい規則も無ければ面倒臭い筈も無い。赤祿々な天真な海の生活、「武夫原頭」に「柏の旗」に歌はれて行く健兒の自然の意氣、焼杉の下駄が影をひそめ櫻の棒が細くなるのを憂ふる土に暫く見せてやりたい、此の火の様な意氣と鐵の様な腕さな。

水泳部がいつも苦しむのは合宿所と師範とのことだそれが今年は何の滞りもなく行けて愉快な二旬の生活の幸先を祝うた、四月から探した甲斐あつて合宿は絶好の場所に見出すことが出来た。更に吾人が感謝に堪へないのは同じ五高内の池田先生が師範たることを快諾され合宿の陋屋に起居を同じくせられて指導の勢を取つて下さつたことだ。私は併せて振古未だ見ざる物價膨脹のため合宿費を豫定より高めればならなかつた事を部員諸君に謝せればならぬ。今玄海の溝を墓うて來た大正七年度の部員を左に記さう。

部長 野々口勝太郎先生

師範 池田 一幸先生

委員 長谷川 公一 藤田 重明

部員(來會順)

長谷川 公一	山下 精二	伊丹 四郎
大塚 捷平(京大)	藤田 重明	今吉 敏雄
崎山 參一郎	龜井 金造	辛川 正部
山田 義見	安住 正夫	蓮尾 秀(九大)
安部 壽	瀬戸 正雄	岡野 茂雄
井上 武(東大)	岡田 勇	田中 泰三
平泉 貞吉	牧川 鷹之助(東大)	溝江 昇(九大)

島内 大藏 井上 馨 三村 武俊
蓮尾 卓(九大) 古川 俊勝(東大) 美間坂 剛太(東大)
市川 辨次 吉原 政智 池田 小一郎
宮田 喜一 大島 京一郎 迫 靜二
田中 吉郎(九大) 田中 耕作 栗田 滿義(九大)

空閑 德平(東大) 池田 鹿一(東大)

習學寮から借り受けた「行人」や「三四郎」が三四郎達の無聊を慰さめる。テニス、キヤラチボール、トランプ、圍碁、新聞、雜誌、何でもござれ健兒活動の同伴に遺憾はない、左に龍田男の子の活躍振をありのまゝに展開しよう。

七月十五日曇(開會)來會者、山下、伊丹、大塚、今吉、

イの一番に伊丹君が来る。海は灰色に泣いて浪は白く崩れてゐる。それでも今日から愈々龍南の子の海の生活……山から壓迫せられた熊本では僅に藻の多い畫津湖によつて水さいふものに馴染んでゐる……が始まるのかと思ふと身内の血が無性に躍る。玄海の鹽風に十年の苦節を守つてゐた古い部旗は骸骨を乞うて、若人の血さながらの新らしい旗が耀くばかり紅く翻る白い服の中學生達が眩しさうに叫んで行く。

正午京大の大塚君が訪れる、次いで藤田君が馳せ參する。浪に恐れぬ龍田の若人も寒さには僻易する、寒い海を避けて水清い松浦川の松蔭に扁舟を泛べる。雲の破れ目から申譯に顔を出してゐた太陽が又姿を隠して冷たい風が河面を撫でて行く。松浦の長者の娘佐用姫が外つ國に舟出する夫挾手彦の跡を墓うて領巾振山から飛んださいふ松浦岩は今も尙千古のローマンスを二つの足跡に刻んで川の中流

につまじやかに横はつてゐる。龍南の鬚男の毛の多い足は姫の小さい優しい足跡に合はせるのに餘りに無骨で餘りに大きい。

「あの山から飛ぶとは姫もあんまりお慥姿な」薄霧の中に融けて行く領巾振山の頂を仰いで龍田童の口善惡なさ。去年から唐津で借りることにした蚊帳の新らしい香を親しみながら深い一夜の眠に入る。夕潮は紫に匂うて若人達の快い夢を潤す。

七月十六日、曇、蓮尾秀、崎山、龜井、辛川、

風は少し屈いたが浪は依然として高い。向ふ三週間海の健兒の命の舟を河口から海濱へ廻航する、大塚、伊丹、今吉の三君と私と、舟は新し船頭衆は若したが腕に覺ゆる餘りない悲しさには忽ち逆巻く怒濤に捲込まれて頭から濡鼠、浴衣が肌につたり喰つて北風が眞向から吹きつける寒さ、正午昨年の勇者龜井、崎山の兩君が来る二時から一同濱に出る舟の出されぬ口惜しさに河童達は無闇に遊び廻る。生蕃の尊稱を奉るにはまだ恥かしい程白い肌を砂の上に曝してやがては押しも押されもせぬ生蕃と成り済ます修業を積む。夕方辛川君が来る。皆で唐津の町を散歩する九州の京都と云はれる小綺麗な町は山紫に水明らかなばかりでなく人のタイプまでが似てゐる九十度を越ゆることは年に一度あるかないかの涼しさは京の都にもまして嬉しい。赤い灯が丁田川に映つて月は靜に上つて行く。

七月十七日、曇、池田師範、山田、安住、安部、蓮尾、

秋がもう木々の葉裏を掠めたやうな寒さ。冷めたい風が襟元にひやりとする。大塚、藤田、崎山、長谷川、伊丹、今吉、辛川の七名で虹の松原遊覧に出かける。碧い海、白い砂、緑の松、夕陽斜に指して紫雲ほのかになびく時さながらに天女の衣の帯なる虹は花の満島

から藤の濱崎にかけられる。まだ淋しい海濱院の娛樂場に腰を下して玄海から匂うて来るオザンの香に浸る。二時池田師範が御來會あつて一同活氣づく。熊本で八十六度あつた先生の寒暖計が唐津では七十五度に下る。毛布を纏うて花袋の「生」や漱石の「行人」に就つてござる達摩連が其處此處に出来る。物懐い濤の音が枕元に唸つて健兒籠城の哀れさを思ふ。夕飯後先生達とトランプに興を湧かせる。夜雨が大路の櫻並木に注いでゐる。水郷の雨は聞くにふさはしい。

七月十八日、晴、瀬戸、岡野、井上武、

怪しかつた雲行も十時頃にはカラリと晴れて連日雨に惱んでゐた健兒の意氣は無性に揚る。松籟爽かなる鳥島に舟をやる海程に小波も立たぬ。大氣清く磯の香甘く白日を浴ぶる龍南子の鐵腕忽ち熱血に漲る。武夫原の名ピッチアー水切の藝當に白石、玄海に飛んで魚は尾を振つて逃げる。泳いで歸る。一哩の行程、丁度好い遊び場だ。午後再び鳥島舟行隨意游泳、泳ぎ厭いた河童達は一里の海濱を縦横にランニング、幅飛に力を入れる。疲るれば白砂の中にもぐり込み青天井に腕枕、蓋し別府の砂湯も其處退けの跡である。

七月十九日、晴、

天晴れ風風いで暑さ傾に加はり初めて夏の氣分を享く。龍田童の齒愈々白し。午前隨意練習、午後鳥島舟行、

七月廿日、晴、發會式、岡田、田中、平泉、島ノ内、井上馨、三村

牧川、溝江

九時舟を出す。砂地には一群の漁夫が朝の靜かな空氣の中に地引網を弛やかに曳つてゐる。のんびりした平和の氣分と若人の心をそそ

る原始的な味ひがある。皆も一緒に交つて引出す。どちらが漁夫か
どちらが書生か一寸判断がつかれる。網が濟めば鱸の稽古、一丈
五尺の鱸を挽はます元氣はあるが風と浪との戯弄のためには若い船
頭衆も少からず手古磨る。午後二時夕立。涼風一過。浪靜かに遠山
鮮か、雨後の空氣は譬へやうも無くすがくしい。七時から大正七
年度水泳部發會式並に師範歡迎會を開く。余の簡單なる式辭、師範
歡迎之辭に次いで師範の御挨拶と水泳に關する御注意があつて後
は宴會……と云へば大きく聞ゆるが實は唐津名物の松露饅頭と桃と
ラムネ、それに帝大の牧川清江兩君から師範に贈られたビールを。
アルコール分は游泳中の禁物だが今日は河童除け水開きといふ先生
の特別の恩典。やがて自己紹介に次いで「武夫原頭」が歌はれ「柏
の旗」に移り「アカンシヨ」に終つたのは十時半。此日水泳部の先
輩古川、蓮尾御兄弟、美間坂等の諸兄が雨中態々おいで下さつたの
は感謝に堪へぬ。

七月廿一日、晴、宮田、

昨日作つた日課表に依つて師範に就いての正式の稽古を始める。今
日は手繰游。昨夜の豪雨のために海水が橙色に濁つて師範の游泳振
が見えぬ。其上潮流が急で滔々として松浦川から吐き出される濁水
のために押し流される。現在合宿者のみで十九名、例年に無い盛況。
午後再び舟を出し第一の浮標より濁水を蹴つて島島に泳ぎ着く、流
を横きつて大拔手の早業、壯絶なごいふ語は餘りに陳腐。黄い水に
白い石、石投の名手は盛に水を切らす。夕飯後は「武夫原頭」や「柏
の旗」が合はさつて龍南健兒の元氣漸く旺盛。

七月廿二日雨後晴、大島、

昨夜の怒號が雨を呼んで床の中から遠雷を聞くがそれも十時頃から
カラリと晴れて海は鏡の模、雨後の大氣がひや／＼と黒い肌に觸れ
る。舟で島島を一周する。島の東側に長く突き出た砂地を迂迴する
のを面倒臭いと思つて皆で砂の上を擔いで陸地横斷、九州一の變頭
五高健兒の面目が如何にも躍如として居る。歸れば鱸の指身に舌鼓
を打つ、午後水澄む、一裏押を教はる、鉢かすう／＼と伸んで行く
所は何ともいへない氣持だ。例の如く海濱で大相撲龜井、岡田兩君
を東西の横綱として龍攘虎搏の大壯觀、四邊を取巻いた大供小供さ
てはあられもない縞綱模様の海水服に肌を包んだ姫御前まで鳴を靜
めて見てござる。夕飯がやたらに行けて誰かと評したフルドツクが
くし／＼やみした様な顔をばさんが形容を超越した面相を表現する。
安住君が合宿生活に参加し大塚君が所用のため一時去る。夜に入れ
ば満月折柄の浮雲一片二片、巷に紅塵を遮くる同志七名孤舟に竿指
して松浦瀉の月を愛づ。あはれ鏡山の名月、夫戀松に懸りて天地靜
寂舟を敲けば銀光浪に碎けて細鱗躍る。天を仰げば永遠の呼吸靜に
聞ゆ、水に俯せば悠久の姿微に見ゆ。

この日牧川君より國民新聞の寄附あり。大阪朝日と共に合宿三週の
生活を潤す。厚く御好意を謝す。

七月廿三日快晴、追

午前一重押練習、今年は博く淺くといふよりも狭く深くといふ主義
を執つたので同じものを二日間に亘つて稽古する。その結果は遠泳
に照らして見るに頗る好成績だ。唐津游泳協會は廿一日から佐賀師
範は昨日から唐津中學は本日から何れも水泳の練習を始めて居る。
人数は少いが我部は體然として斯界の重鎮、責任と緊張の感を深う

する。位置も最も好い場所を占めて居る。午後驟雨一過、鳥島まで遠泳の練習極めて好成績、夕海濱に出て寮歌の愛誦、愛誦は高唱を爲り高唱は舞踊となり舞踊は跳躍を爲る。合宿に歸れば近隣の病家より「少しお静に」その請願されど沈黙と静寂とは若き龍田ツ子の、悲哀、義氣に富む郷等行いて海に歌へ、松嶺と濤聲とは汝が合唱者。

七月廿四日、快晴、吉原

天氣晴朗なれども浪高し。明日の三哩遠泳の準備に鳥島を廻る。小舟に一行十七名乗り込みし爲めあはれ激浪に一たまりもなく沈没、而も所は鳥島左側名代の深淵、側には先日暴風雨にて難破せし團平船、怪獸の肋骨の如き龍骨を曝け出せり。浸水したる儘にて泳ぎながら巨巖に引張り行く。後で調べれば是も半分は例の故意沈没、龍田童の茶目氣實は遂に測り知るべからず。生命がけの悪戯、お陸にて水衣三着と眼鏡一個とは十七の生靈の身代りとなつて水祭の果敢ない最後、歸りは鳥島から西の濱まで浪に乗つて一氣に泳ぐ。午後風波激し。筆者は七ツ釜見物の藁氣船乗客の爲西唐津の三井に行きて缺課、一同は激浪中を泳ぎ廻る。夕飯後運動家連中は唐津中學のグラウンドに行きてボールにテニスに鐵腕を振る。

七月廿五日、雨、北風

「風強かるべし沿岸注意」毒々しい赤紙が警察の揭示臺に物々しく張られてある。三哩遠泳も遂に中止、けれども癪に觸つた連中は怒濤の中を跳れ廻つて白い波頭に拳骨を喰はせて居る、午後風雨益々猛烈、圍碁やトランプがはづんで敗けた奴の黒い皮膚がしつぺで赤く張れる、宮田君一時去り大塚君歸省。

七月廿六日、雨

北風は南東風に變じて益々強烈、波は逆に玄海に向つて狂ふて行く、三哩遠泳再び延期、藤田君達は海濱を傳ふて西唐津まで烈風中を散歩、一日でも泳がずには水神様に濟まぬといふ連中は何の物かは盛に飛び込むが水は氷の様に冷めたく加ふるに頗る嫌辛くて眼が開けられぬ程痛い。先生と迫君と安住君と四人で第二の浮標まで鵜を生捕に行く、今一間と云ふ所で白い翼を擴げて悠々と飛び去る。迫、安住の兩君は早く歸つて先生と私とは少し後れて第一の浮標を通過したかと思ふと突然「助けて呉れエ」その悲鳴、聲の主はと見れば六尺豊の大男、四肢をもがいて如何にも苦しう。續いて「助けて助けて」と絹を裂く様に二聲、塩辛い涙は容赦無く頭からかぶさる。拔手を切つて近寄ると「體を貸すな、早く舟、舟」と先生の聲私は直標崗に近づいて叫ぶ「よし來た」と迫、安住の兩君、十人かゝらなければ出ない舟を二人で下す。艫が無い。折柄歸つた西唐津行の一行に其旨を叫んで三人は泳いで舟を押す。先生は大男に手拭の端を握らせて靜に泳いで居られる。直ぐ舟に引上げる、實に重い。碇を下す。艫が飛んで来る。岸に着ける。水を吐かせる。敏速なる活動、應急の處置。斯うして有難い命が一つ助けられた。

此日我水泳部は二つの善事を行ふた、後者は西唐津行の一隊が菓子屋を襲ふた常習犯の晝寢を街路で追跡し首筋を引捕へて後れて走來て來た警官に引渡した事。時も同じ、我等が海に萬歳を唱へた時に彼等も陸に凱歌を奏した。人命救助と盜賊逮捕。吾人は内心の快感を禁じ得ぬ。午後風雨愈々激しく遂に籠城、夜池田師範より茶菓の響應あり。名物松露饅頭に腹鼓を打つ。「先生の健康を祝す」と叫ぶ

は誰、流石は臨機應變の龍南才子。腹が出来れば再び濱にストム、白シヤツ、白鉢巻で白虎隊宜しきの體、折よく雨も治まり風も止んで下弦の月は斜に懸つて、城山の一つ松がくつきり浮いて見ゆる。夜は白い波の音に更けて行く。

七月廿七日、曇、田中、

曇つては居るが風は無い。愈々三哩遠泳決行。連日の雨に氣を腐した勇士達は緊裡雄躍三日の癩を一日に晴らさうとする。九時師範の御注意が終つて一同十四名二列縦隊になつて進む。行路は鳥島迂廻、海水は極めて清澄だが氷の様に冷めたい。半哩も行つた頃には体は次第に麻痺して皮膚は眞赤になる。流石の猛者も七十度を遙に降る寒冷には如何さもし難い。遂に師範は鳥島に上陸を命ぜられる。一同の唇は紫色に變じて体は痙攣した様に震へて居る。舟で歸つて濱邊で師範が親ら寫眞を撮られる。白砂の中に土俵を描いて角力をさる。合宿に歸り、池田師範御厚意の汁粉を十杯も平げて渾濁たる精力振を此處にも發揮する。午後飛台を出して丈餘の高さから盛に飛躍、大島君の水際立つた逆飛には一同感嘆措く能はぬ。夕飯後昨日助けてやつた人が命の御禮に來る、丁重な謝辭を述べた後で松露饅頭の大箱を呈する。一同欣喜雀躍早速之を原料として茶話會を催す。龍南會水泳部の流行語「松露饅頭」は其源を此處に發して居る。賄なばさんの寵兒八郎を水の中に突き込んで「ゴロ松露饅頭か」はチトひどい。

七月廿八日、晴

今日は水泳部行事の一たる鏡山登山、海の河童の山登りとは變れば變る世の中だ。鏡山……万葉の歌には領巾振山と詠み又名を七面山

と云ふ。一行十五人午前八時出發、虹の松原と松浦川との間の清い路を過ぎる。目の覺める様な青田、澄んだ風が緩やかに流れる。晴れた大氣にクツキリと浮いた山の輪廓、焼杉下駄の足蹴にかけるには餘りに惜しい楚々たる美容、新登山道を極はめる。五抱へに餘る佐用姫夫戀松がそのかみの姫の操をたもへて縁に匂ふ、神集島、姫島、玄海島などほのかに霞んで唐津の町の美しい薨が銀鱗と光る、松浦灣の絶景が松の葉越しに見ゆる。頂上で一同カメラに入る。他處行き顔を爲終るか終らない中に盆を覆す様な驟雨、大急ぎで正一位稻荷大明神の祠に逃げる、御籤を引いて「縁談整ふ」に隨喜の涙を流して居る者もあれば「水難の相あり」に悲觀して御座る方もあらつやる。歸路は虹の松原に取り名物松原おこしに息を入れる。歸れば一時、健啖愈々出でて愈々猛烈、午後は高島裏にさぐり狩り、八十丈の絶崖忽ち海に入る處怪獸の洞窟の様な深淵、海人の親類宜しくの一同潜水には妙を得て居る。獲物を抱いて濱に歸れば夕陽紫に行人の陸白砂に長い。

七月廿九日 三哩遠泳 快晴

一再ならず天候に禍せられた三哩遠泳も見事に成功、水は清く波は靜、水温八十度、鳥島は大迂廻、鏡の様に靜かな海は腕を動かす度に小さな波紋を畫き出す、大島から西唐津女學校、中學校と目標が轉じて二時間二十分を経た十時に井上君を先頭に元氣渾濁として上陸、先生のカメラの中に収まる。午後隨意練習、競泳に花が咲く、追君が見事な、拔手で一着。夜松浦川に觀月會、小さな紅張灯が水に映つて如何にも艶しい、星が額に流れる。理科の若い天文學者達は北斗だの大熊座だの盛に御得意の學説を傾ける。松浦川を下つて

丁田川に溯る。十時半浮嶽の影から水瓜を割つた様な月がぼつかりと出て白い光が水に滑る。

七月卅日 快晴

午前兩拔手、飛臺から放れ業を演じて鵜を驚かせる、手繰、一重押二重押の豫備試験がある。明日の五哩遠泳に心して午後休養、粥や葛湯等の原動力を乗せる舟を渡場から海濱に廻す。夜海岸散步潮の香に親しむ。

七月卅一日、五哩遠泳、快晴

微風が和らかに赤銅の肌を管めて行く。うららかな日には島の女は終日濱の白砂の上に長い黒髪を梳けると云はれる。姫島がさながらその乙女達の笑みの様な曙光の中に明け初める。六時半腹を造つて八時汀に立つ、若い男の子の血潮は火を燃わても柏の旗が朝風に靡る。行程は濱から三哩の高嶋を右より迂迴師範の御注意が濟んで愈々足は地面を離れる、二列縦隊、一絲亂れぬ泳振には小波さへ立たぬ。水溫八十三度、右には粥と氷砂糖とを積んだ舟が警戒し左には葛湯丸が待る。島の松原を左に見る頃潮の流は漸く早い、裏は名だたる深淵、美しい人魚でも居さう。歸りは小波が出たが却つて好都合十二時三十五分殆んど六哩半を遊ぎ抜いて無事着陸、絆々たる餘裕は忽ち渚に圓を畫いて獨特の五高ダンスを形造る、「五高五哩遠泳成功萬歳」の聲が海の空氣を震はして健兒の意氣正に天を衝くの慨がある。午後練習隨意四時より一同吉原君の家へ招待せられる。松浦の風光を賞し茶菓の饗應を謝し更に有志は松浦岩に佐用姫の跡を偲ぶ七時歸る。本日の遠泳成功者は左の諸君

井上、龜井、崎山、迫、藤田、島ノ内、安住、安部、岡田、岡野

山田、大島

八月一日、快晴

水泳部の大椿事我々の命の綱と頼む舟の紛失、六時半師範が濱に行かれると海に引き出した痕跡と下駄の齒型がありと盡かれて舟は影も形も無い、一同の憤怒は絶頂に達して氣早い連中は捉へぬ先きからぶん殴れと叫ぶ。早速船主と警察とに通知して置いて更に部員を徒歩、和船、ボートの三組に分ち全日を費して大搜索に従事する、殊に休暇中には生徒と雖も絶体に貸さぬと云ふ中學の規定なのを五高出身の校長の厚意で貸して貰つた七人乗のボートは搜索上とだけ爲になつたかわからない。徒歩は西の濱の沿岸一帯を、和船は松浦川と虹の松原とを、ボートは海上並に灣内諸島の周圍を舟といふ舟、隅といふ隅を一々調べ廻つたが遂に分からない。晝からは各其部署を交代する、依然として不明ボート組は遠く海上七哩の神集島まで遠航し對岸港村の役場、駐在署に依頼して歸る、浪は可なり高い。夜は不安と混亂とに暮れて舞鶴城趾が寃の様に聳れてゐる。合宿に着いたのは九時、各部の報告を綜合しても何等得る所がない、全日の搜索に費重なる稽古を失つたばかりか三井の厚意の七つ釜遊覽も謝はらなければならなかつのは返すくも残念。

八月二日、快晴

午前、手繰、一重押、二重押、兩拔手の試験がある、それが濟めば勝手に泳ぎ廻る。水は澄んで眞珠の様だ。

初段、田中、一級、崎山、二級、龜井、井上、岡田、迫、三級、山田、安部、大島、岡野、安住、平泉、藤田、三村、島ノ内、伊丹、四級、瀬戸、長谷川、今吉、

午後飛台から得意の放業、逆轉、宙返り、木の葉落し、まるでスキの飛行其處退けの体、墜落しても潜航艇に早變して獨艇ならぬ黒鯛を追驅ける。忽ち渡場から舟發見の飛艇が来る、鳥島碇泊の黒船經子丸が玄海漂流中なのを拾得この事、一同雀躍カールの音も高く同船に漕ぎ付け厚く船長に謝し心ばかりの禮金を贈つて濱に引上げる。

八月三日、快晴、十哩遠泳

生れ出る喜を最も強く具象化した旭日は今浮嶽の峰を離れて鵜の舞ふてふ松浦は乳色の霧の中から明け初める。十哩遠泳の日は神に幸せられて天に一片の雲も無く水に一重の波も立たぬ、七時濱に集合靜に体を濡らし四肢の關節を和らげる、コースは鳥島の左側を通過し高島を迂迴し浮嶽の下より虹の松原の先端濱崎に向ひ海濱院裏に轉じ姉子瀬の沖を通つて西の濱に引返す、正に直線十哩、多少の彎曲を加ふれば僅に一哩や二哩は増す、ドロインズの先生であられる池田師範が親しく地圖の上に精測せられた行程、五高男兒は僞善と誇大とは蟲が好かぬ、愈々七時半同じく二列縱隊で出發、救護並に食糧船二隻、一は池田師範、今吉君、余之に乗じ他は藤田君、幸川君之を操る。參加の勇士總て十三名、今日の晴の戰に一番衆の功名を爲さんものと手ぐすれ引いて待つて居た十二名の荒武者に今一人はげなげにも齡十六の若腕もて一騎當千の面々を列べんとする、唐津中學二年生、合宿の東隣嘉村名探偵の愛息。氣温七十八度、水溫八十度、八時半鳥島通過、この時龍南水泳部の團將、板東一の旗頭井上馨君が足痛の爲止む無く上船せられたのは返すくも遺憾至極、九時三十分高嶋の西端を過ぎ十時には既に裏を繞る。姫島が

手に取る様に見れて海の女神の精の様な純白の鵜が二羽追ひつ追はれつ一行を導いて呉れる、十一時漸く葛湯や粥が賣れ出す、氷砂糖に胃の紐を締め直す若武者もある。十二時濱崎から約半哩の所で方向を出發點に轉じた頃から波が次第に高くなつて進行を妨げることを夥しい。一時海濱院の沖を通過、時に水溫八十三度、波は益々高くて横から打つげる、健兒の志氣は愈々昂つて其頬には微笑さへ浮ぶ。

龜井山田の二君は二三町先に進行し他は一團となつて並び進む。二時満島沖を過ぎ二時半には見事十哩を突破して出發點西の濱に上陸する、直に池田師範の發聲で「五高水泳部十哩遠泳成功萬歲」を三唱し寮歌、部歌が高誦せられる、健兒の意氣の發露の聲は遙に玄海の濤を震はせ胡砂吹く滿洲の空を越えてゴビの沙漠の砂煙の中に消えて行く。飛台を擔ぎ出して三週間磨き上げた色の美しさを今日の記念にカメラの中に収める。合宿に歸れば汁粉が待つてゐる、食ふの食はぬの賄のなばさんが神經衰弱に罹りはせぬかと危ぶまれる位。晝の活動に夕飯が濟めばもう華胥の國に遊んでゐる、今日の晴の舞臺の勇士の面々左に勝名乗りを舉げよう。

追靜二、龜井金造、崎山參一郎、安部壽、山田義見、岡野茂雄、岡田勇平、泉貞吉、安住正夫

遠泳の結果進級左の通

一級、龜井、

二級、山田、岡野、安部、安住、平泉

八月四日晴、散會

今日は一日を遊覽と慰勞とに使ふ。名殘の爲に海に別れを告げんと泳ぎに行く特志家も多い、九時から三井の厚意のランナで玄海の奇

勝七ッ釜探勝に出かける、船の中では伊丹君の土産の佐賀名物丸房露をバクついて快談縦横。巨獣の口の様な七つの洞窟が支海の濤を嘲ける様に聳れてゐる偉觀に接した時はつく／＼自然の奇蹟を思はせられた。波が荒れて孔の中に入る事は出来なかつたが六角に結晶した玄武岩の大柱が風に唸つてゐる光景は何とも云へぬ物凄さ。時間が無いので田島神社に松浦佐用姫の化石を見る事が出来ないのは少からず風流子を失望させたが止むを得ず西唐津に歸航する。三時から中學のコート借りて部員總出のテニス大會を催す。ラケットを握るも握らざるも、上手も下手も玉石混淆、喜劇も奇劇もこつちやまぜ、特に生蕃ダンスの天才君や印度人島吉君の活躍振は正に當日の花、激戦數番遂に優退組(田中)伊丹と(長谷川)の優勝戦となつて凱歌は(長谷川)の上に擧げられる、テニスが終るゝ十月の運動會の豫選競走二百米、一等島ノ内、二等藤田、三等伊丹、長谷川同着、四等龜井夕飯は今日を名残りにすしにさし身といふ御馳走。七時から閉會式を擧げ、お互の健康を祝福して松露饅頭に惜別の敬意を表する。語る所何れも三旬の生活の愉快、海の生活の悦樂ならざるは無く部歌迸り寮歌叫ばれて和氣溢るゝ中に散會したのは正に三更。夢は遙に故山に飛んで、弟や妹に鐵腕を誇つてゐる、友達には支海を泉水の様に大風呂敷を擧げてゐる、唯新參の下女からばてもまあ當家の若旦那の色の黒さは………と思はれて。

潮黒き支海の波よさらば、綠濃き松浦の水よさらば、活動と悦樂そは卿が龍田男の子に捧けし至純なる生活の泉なり、糧なり、彼等此泉によつて新らしき智を汲み新らしき力を育まん。我今卿に別れんとす、されど來ん年新らしき龍田男の子は若き日を悦びて卿に見え

ん、卿再び彼等に神州男兒の真髓の妙諦を啓示せよ。

——潮鳴を聞きつゝ唐津にて、長谷川記す——

柔道部報

一、大正七年九月十日、京都遠征の爲め特に一致團結の練習を必要とし吾部最初の合宿所を學校附近に設く。

一、九月十六日より毎日午后三時より猛烈なる稽古を始む。

一、十月十日は開校紀念日なれば例により吾部の柔道投形、固形及び極形と亂取を式後道場にて行へり。

投形 取り 荒巻——受 龜谷

極形 取り 二段田——受 初段竹村

固形 取り 朝川——受 鳥井

亂取 第一回(龜谷)本多(和)田(大)谷

第二回(竹村)三輪(鳥井)膳所

一、十月十四日、京都遠征撰手確定左の如し。

田中、荒巻、龜谷、朝川、竹村、鳥井、本田、和田、新居、景山、本

多、中村、八廣、元野、金子、膳所、宗、大阪以上拾七名。

一、十月廿一日、武徳殿に於ける秋季大會に吾部の出演撰手諸君左の如し、此日皆大に奮闘す、五高の意氣武徳殿を壓し成績良好なり

左に當日の戦績を記さん

×〇五高(膳所)正成
〇二師(森本)喜徳

×五高(城戸)良之輔
八分(松本)朝明

(大谷男ノ代リ)
〇五高(八廣)修三
一師(西口)幸齋

(中村能二)代り

×五高(金子重忠) ×五高(和田士六)
○江口(大濱嘉兵衛) ×江口(太田黒伊平)

×五高(本多益次郎)
(大坂盛夫)代り
○江口(米村益次郎)

○五高(景山信義) ×五高(八廣修三)
星野(上村留雄) ×星野(田中末熊)

五高(鳥井義男)
高工(御厨忠文)

五高(元野泰) ×五高(本田保草)
○高分(友村次) ○星野(本崎辰九郎)

×五高(金子重忠)
熊中(松前重義)

×五高(鳥井義男) ×五高(朝川虎彦)
○矢野(阪梨克己) 星野(徳永茂八郎)

×五高(龜谷軍平)
矢野(上野勉)

○五高(荒巻昌之) ×五高(初段竹村茂孝)
憲兵(永富直彦) 矢野(初段松前顯義)

右終つて撰拔勝負あり之に出演せるは金子、朝川、荒巻の三君、朝川君良く奮つて四人を倒し優勝し多年の宿望を遂げこゝに第一等賞を得荒巻君又第二等賞を得名譽ある勝利の桂冠、久振りに吾部に在り豈快ならずや當夜は祝勝會を水谷にて催し痛快なりき。

一、十月廿三日放課后修猷館旅行隊柔道部と吾部は濟美館に於て神江教師審判の下に紅白勝負を行ふ、吾部奮ひしも遂に惜しくも敗れたり、終つて茶話會を催す。

一、十一月初旬より悪性感冒蔓延甚だしく吾部撰手の是に罹らざる者僅かに二人なり、之が爲柔道稽古は暫時中止するの已むなきに至りぬ、十一月下旬に至るも僅かに數名の稽古を見るのみ、此處に於てか京都の遠征雄圖も稍疑問となり此頃より撰手諸君の經過如何を窺へり、其の内時日も遠征期に切迫し遠征決行如何に就て議紛々たるものありき。

一、十二月七日(土曜日)武徳殿に於て第一回特別講習會開催され後二時半より吾部對武徳會熊本支部の紅白勝負行はる審判員は宇土三

段。戰闘振左の如し

紅 五高 白 支部

◎大將初段竹村 支田 一郎大將初段

副將荒卷 上野 勉副將

朝川 西村 長平

鳥井 坂梨 克己

景山 牛島 健三

和田 大濱嘉兵衛

和多 増田 政一

金子 松前 重義

八廣 天野 幸太

膳所 牧野 義久

福岡 忠

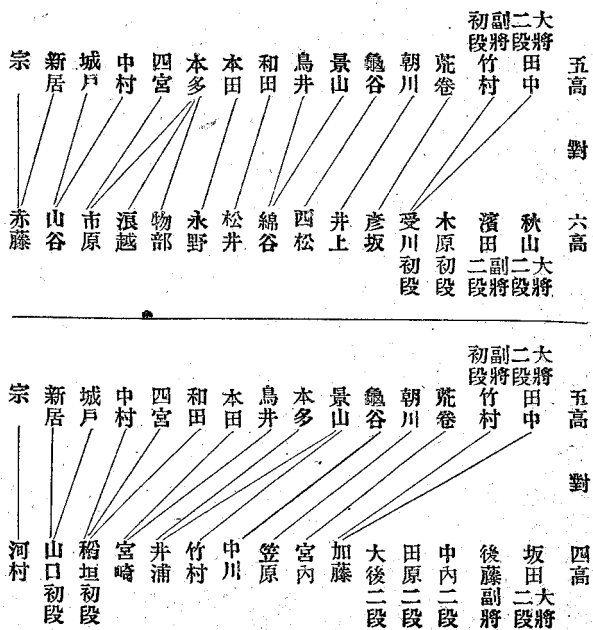
一、十二月九日、生徒集會所にて吾部員一同の集會を催し遠征に就て議し愈決行する事に定む、早速東龍會先輩及京大先輩に宛て右の件通知せり、此日より毎日稽古を勵む、此度の遠征決行は敢て勝敗は眼目させず唯如何に對校勝負の卑劣にして猛烈なるかを經驗するに在り。吾等は正義の陣を張つて戦はむとするものにして吾等が意氣は黄金なり勝利の冠何かせむ、唯全力をつくし如何なる程度迄實力を發揮しうるかに存するものにして優勝の野心は寧ろ之を大正八年度に期するものなり、然るに貧弱なる實力を洛陽に曝露するは五高の名に對してのみならず吾部の先輩諸兄に對して何の面目か是あらむ、例年遠征の際には先輩諸兄に對して寄附勸誘を爲し來りしも此

度は特に是を廢して龍南より受くる遠征補助金を除いては各自自辨
 となしたり、是實に忍びずと雖事態こゝに至つてやむを得ざるもの
 あり、苟も五高より派遣さるゝ名譽ある撰手たる以上遠征の如き特
 に撰手を出來得る限り優遇するの至當なるは論をまたざるゝところな
 り、之に反して撰手たるもの五高の名を重んずる事切なり、或は幾
 多の犠牲を拂ひて其の苦衷や余りあり、誰か之を知らんや
 一、試験前に八廣君黃疸を病みて歸國し大坂、元野の兩君差支あり
 て遠征に加はる能はず又試験中に膳所君打撲傷を起し金子君相次で
 風邪發熱して不可能となり周章狼狽措くゝところを知らず遂に八方奔
 走の結果十二月廿三日に至りて右の代人として左の諸君を補ふを得
 たり、宗、四宮、城戸の三君に承諾を得、

一、十二月廿三日を以て愈撰手決定す左の如し、
 田中、竹村、荒卷、龜谷、朝川、鳥井、本田、和田、景山、新居、
 中村、本多、宗、城戸、四宮、以上拾五名

京都遠征記

- 一、十二月廿四日午后四時半上熊本驛を出發。
 - 一、全廿五日夕七時無事京都着驛、數多吾部先輩諸兄の出迎を受く、
 直ちに吉田町神樂坂三石黒方なる宿所に入る、晚食後大學道場にて
 輕き稽古をなす、
 - 一、廿六日午后より大學の歡迎會に臨む、
 - 一、廿七日午后二時より六高對五高試合審判官は佐村六段、
 - 一、廿八日午后二時より四高對五高試合審判官は磯貝七段、
- 左に敗績を記さむ、



嗚呼慘た戦史偲ばずや是實に吾等豫想の敗陣とは雖も怨みの涙骨髓
 に徹し神樂丘に悄然として引上げたり、吾等茲に苦き經驗を得て以
 て新に試合法を飽く迄研究し以て來らむとする遠征に悠々雪辱の意
 氣を晴らす可きなり、切に撰手諸君の自覺と親睦と猛練習とを望む
 ものなり、

一、廿八日夜先輩諸兄の發起にかゝる慰勞會に臨み一同大に悲憤慷慨
 慨す。廿九日朝宿所自由解散す、遠征記を終るに臨み神江教師の情

厚き御監督と村上四段初め有田、廣江、山田、佐々木、椎木、小本氏等の熱誠甚大なる應援を真心より感謝するものなり。

大正八年一月部報

一、京都遠征の敗戦に鑑み吾部は早くも十四日より廿一日迄十八日間の寒稽古を前六時より開始し本年度よりは皆勤出席者表は委員自ら嚴格に調査する事とせり

一、廿二日柔道昇段級披露の揭示

竹村茂孝君去十二日付を以て講道館二段に列せらる

荒巻昌之、龜谷甲平、朝川虎彦の三君は同日付を以て講道館初段に列せらる。新初段三名には斯道奨励の爲め柔道部より黒帶三本昇段祝として寄贈せり、因みに左の九名を新一級に列す、

景山信義、本多博、中村能二、金子重恵、八廣修三、宗道太、四宮

進、城戸良之輔、膳所正成、以上、尙新二級に列せし者左の如し、

是松準一、岡田勇、吉田定男、の三名なり、

一、廿一日を以て十八日間の寒稽古の千秋樂を遂げたり、

正皆勤者三十六名の多數を出したるは其の精勵思ふに余り有り、尙

納會は二月一日に開催の筈なりしも折柄龍南會役員撰擧に差支へ他

日に延期す。

(二月廿一日委員稿)

雜報

懸賞文批評

前號の續き

一つ書き

野 生

●若き老母 悲哀的

一卷頭の暗示今少し冲澹にあつて欲しい

一千秋の獨舞臺は智恵ある趣向立てとある

一仲人の亂暴によることはよく分つてゐるが「親の強情の爲めに元

ないへば財産の爲めに一生の幸福を臺なしにされた」處がよく著

はれてゐらぬ

一そこは「財産の爲めに」といふ所の對現代呪咀といふか諷刺とい

ふかゝあつたら深刻になつて讀む人の骨を刺すやうな力も籠つた

であらうに

●何の爲め 男性的

一きびしい心持のよい作

一弱味から強味に移りゆく處よくあらはれてゐる

一趣向は未し

●彼岸の夜 露骨的

一輓子の夜の獨旅、その旅行の原因が原因だけに父は送られぬとい

ふ、其れは義理か、然るに父は詰る所停車場まで送る、其れは人